

「夜間飛行」より「人間の土地」へ

徳 村 佑 市

I

「夜間飛行」の主人公リヴィエールはサン＝テグジュペリの人物の中でも哲人的風貌をもつ人物である。彼は常に厳格な長としてのモラルを持しながら l'action 「行動」の世界に生きている。民間航空会社の支配人として、航空機の発達の初期の段階で夜間航空の開拓という事業にとりこんでいるのである。「行動」という語は、サン＝テグジュペリによれば、le bonheur individuel 「個人的幸福」とは別のところで展開される劇的な世界としてとらえられている。「個人的な幸福」の世界とは夕べのテーブルのランプの光、互いに求めあう肉体などによって象徴される世界で、その中心には女性が座をしめているのであるが、「行動」の世界とはそれとは別なところで展開される劇的な男性的な世界だとされる。

リヴィエールは又自分は les événements 「出来事」に奉仕する身であると考えている。「出来事」というのは生命が新しいものを作り出そうとするとき一名こうも呼ばれるのであって、それは大事業の周りのいたる所から成長し、わき出てくる。あの処女林をもちあげようとするものと同じものの力の働きをさすのである。しかしこの「出来事」はその働くがままにまかせておいて放置しておけば早晚事故を生ずるものであって、それに手を加え、それを従わせねばならぬとされる。そしてこのようにして人は創造するのだとされる。

こうして「出来事」に仕え、夜間飛行の事業を完成しようとしているリヴィエールにとっては正、不正という問題は余り重要ではないように見える。彼は規則を定め、それに少しでももとのものはびしびし取締る。濃霧のため飛行機の出発がおくれてもそれは関係者の責任にされる。森の上で故障して機体を破損してもそれを不可抗力とは認めない。「夕方音楽堂のまわりを廻る小さな町のプチ・ブルジョア」について、彼らはもともと存在しないのだから彼らにとっては正・不正は意味はない。人間とはこねてやらねばならぬ蜜房からとつたままの蜜蠟であって、これに魂を与え、意志を作ってやらねばならないと考えているリヴィエールにとっては規則とは不合理のようだが人間を形づくる力を持つ宗教の儀式のようなものであって、この規則を厳格に履行する事が、部下を自分の殻からぬけ出させ、着陸場の

意志を出発に向って緊張させ、事故をへらすのに役立つ以上、その正、不正はあまり問題ではないのである。こうしてリヴィエールはそれが正、不正の点からすれば問題を含まないわけではないのだが、又彼は愛情のない人間ではないのだから同情もするのであるが、自分の中により強い働きを持つ義務の感情にしたがって、厳格であればある程事故はへるという原則にしたがって、長年働いてきた労働者のロブレを一つの事故のために規則にしたがって解雇もするのである。こうしたリヴィエールの思考の糸をたどって行けば結局彼の実存的な思惟に達する。彼は次のように考えているのである。

「私は自分のしたことが良いかどうか知らない。私は人間の生命の正確なねうちを知らないし、正義や苦悩のねうちも知らない。私は一人の男の喜びのねうちを正確には知らない。ふるえる手や同情ややさしさのねうちも……人生は大変矛盾しているので人生に対して人は自分に出来るようにやつてゆくほかはない。……だが持続すること、創造し、自分のほろびやすい肉体を（永続的なものに）かえること……」

このようにリヴィエールは「出来事」につかえ、劇的な「行動」の世界に住んでいるのであるが、その彼も大颯風の夜に消息を絶った郵便機の飛行士ファビ안의妻からその安否をきづかってかかってきた電話を前にして、自分の住む「行動」の世界の限界に直面せざるを得ない。彼は自分の前に立っているのはファビ안의妻ではなく人生の他の意味だと感ずる。彼はファビ안의妻の声を聞きながら、自分が住む「行動」の世界とはこれまで別のところで展開されてきた「個人的幸福」の世界が急に大きくなり自己主張をはじめたのを感じるのである。リヴィエールによれば「行動」の世界と「個人的幸福」の世界は両立せず、互いに矛盾するものなのであるが、「夕べのテーブルのランプの光、自分の肉体を求める肉体」で象徴される希望と愛情と思い出の国である「個人的幸福」の世界から、ファビ안의妻が自分の権利と財産を求めて立現れて来るのに接すると、彼女の要求はもつともで、彼女に理があると彼は思わざるを得ない。もつともリヴィエールも自分の「行動」の世界にも理があると思うのであるが、何故かその晩は彼女がさし出す家庭のつつましいランプの光に照されてみると、自分の「行動」の世界の固有の真実が、この婦人の前では表明しがたい、非人間的なもののように思われたのである。もつともそのあとで、夫の安否をきづかって会社の事務所へ足をはこんできたファビ안의妻も、忙しく動いている自分の世界とは別の世界、「行動」の世界を前にして、自分の固有の真実が表明しがたいもの、自分の激しい愛と献身がわずらわしくエゴイストなものに変るのを感じるのであるから、「行動」の世界と「個人的幸

福」の世界は両立せず相矛盾するものであるというリヴィエールの見解はこの作品におけるサン＝テグジュペリ自身の見解であると言える。

さてフアビアンの妻のさし出した家庭的幸福のつつましいランプの光に照されて、自分の世界の真実が表明しがたい、非人間的なものになるのを感じたリヴィエールは、かつて建設中の橋のほとりで出た怪我人を前にしてある技師が言った事を思い出す。その技師は「この橋は滅茶々々になった顔に値するだろうか。」という言葉で、全体の利益のために「個人的幸福」の世界が破壊されても良いのかという疑問を提出したのであるが、それに対してリヴィエールは後になって「人間の生命には値打はないとしても、我々は常に何物かが価値に於て人間の生命を超えているかのように行動する。だがそれは何だろう。」と答えた。今消息をたった乗組員のことを思って胸をしめつけられているリヴィエールにはこのことが切実な問題になってくる。橋を作るというような行為であっても「行動」は「個人的幸福」の世界を破壊するものである以上、「行動」の世界に住み、その限界に直面した人間として自分は「何の名に於て」それを敢てするのかと自問せざるを得ないのである。

彼は「夕べのランプの黄金の聖所」で向きあっている顔を思い出し、その幸福を守ってやるのが第一の義務であると思われるときに自分自身がそれを破壊していることを考え、何の名に於て自分は彼らをそこからひき出したのか、何の名に於て自分は彼らの「個人的幸福」の世界を破壊したのかと自問した後、自分がしなくても老年と死がより無慈悲に破壊するであろう「個人的幸福」の世界のはかなさを思い、恐らく救うべきより持続的な他の何物かがあって、自分が働いているのは人間のその部分を救うためではないだろうか。でなければ「行動」は正当化されないと考えるのである。

ここに人間の生命のはかなさを越えてより持続的なものへ志向しようとするサン＝テグジュペリの基本的な傾向があらわれているのであるが、リヴィエールは更に考えをすすめて、古代インカの民が太陽の神にささげるために山の上まで押しあげた石の神殿のことを思い、人民にこのような苛酷な労働を強いたかつての指導者は人民の苦痛に憐みを持たなかったかもしれないが、その死には、個人の死ではなく砂の海が埋めてしまうであろう種族の死には無限の憐みを持ったのであろうと思ひ、それだから砂の海が消し去ることのない石の神殿を山の上におしあげさせたのだと思うのである。

こうしたリヴィエールの思考は P. H. シモンによって次のようにとらえられている。¹

「したがってサン＝テグジュペリの出発とマルロオの出発との間には、きわめて顕著な類似

点が見られる。自分が死ぬのだということを知ることによって不安におののくこの二つの魂は、互いに死に対するすくいを行動に求める。そしてサン＝テグジュペリの思想を、その最初の表現、すなわち『夜間飛行』のなかに求めてさえも、その類似はなおはっきりと見られる。なんとなれば彼は、行動はそれを行う者よりも生き延びる何物かを創造する——例えばマルローの冒険家の《地上の爪跡》のような——というただそれだけの事実によって、あるいはその主観的な目的によって、すなわち歴史のうちにおけるその結果も、それが暴虐、残忍、殺人、破壊の犠牲をはらってもなお持ち得る価値も客観的には測定されなくても、行動が個人に課する超越とエネルギーの規律によって行動を理由づける英雄主義的ディレクティスム以上には出ていなかったからである。『夜間飛行』のモラルは、『王道』のモラルに近かった。この二作品、この二思想は、哲学的な教訓のようにそれに熱中しているというよりはむしろ運命の星の影響のように蒙っている、しかも十分にそれらの作品、思想の意義を決定するに足るほどに明確な、暗に含まれているニーチェ主義から拡がり出た光のうちに照らし出されているのだ。」

II

「夜間飛行」につづく「人間の土地」は作者サン＝テグジュペリが民間航空の飛行士として人間の *la plénitude* 「充実感」を求めて砂漠の上を飛んだ時の記録である。「夜間飛行」ではリヴィエールという主人公が設定されているのだが、この作品では作者自身が自分や僚友の体験を語り、その体験を通してつかみえた人間や文明についての考察をさまざまな角度からのべている。²

まず第一にサン＝テグジュペリにとっては飛行機は認識の道具である。彼は農夫が鋤を手にして自然をほり起し、自然の秘密を知るように飛行機を道具として自然と人間の問題に参画する。彼は飛行機によって、人間を自然との接触から妨げる都会や勘定係から離れ、風や星や夜や砂や海と接触する。彼は自然の諸力と戦い、庭師が春を待つように夜明けをまちのぞむ。そして詩人のように夜明けを味うことを知る。そして約束の地のように着陸場を待ち、星々のなかに真実をさぐる。又村と村とを結び、山や荒野や岩地をさけて町と町とを結ぶ曲りくねった道路を離れ、大空の直線コースに舞いあがって、世界がいかに山嶽や砂漠からなるかを知り、その谷間の気候温順な緑の土地にわずかに花咲いているように見える文明のはかなさについて瞑想したりする。このように一見それから遠ざけるように見える飛行機は彼

を再び自然と人間の古くからある問題につれもどし、それに直面させるのである。このように飛行機を認識の道具として自然と人生に接しようとする態度は必然的に人生に対する「参加」の態度となってあらわれてくる。「参加」というのは世界を認識する為には知性によってそれから遊離するのではなく、人生に参加し、波にもぐらねばならぬとする態度であるが、この態度はこの作品では飛行機を認識の道具とする態度のうちに表明されている。そして彼は次のように言っている。「我々はその秩序の中で生きている世界は、もし人がそこに閉じこめられるのでなければ知ることは出来ない。」

そしてこのようにして「参加」すること、水にもぐることによって知られることは、我々が自然や人間の間におりなす様々なきずな、関係なのである。サン＝テグジュペリにとっては人間は自由なだけでは不十分で、その上に *être un homme parmi les hommes, lié aux hommes* 「人間の中の人間、人間に結びつけられた人間であること」が必要とされる。人間は自由であって、愛される権利、北でも南でも好きな所へ歩く権利、自分の労働によってパンを得る権利をもつ。しかしそれだけでは不十分なのであって、解放された年老いた奴隷のバークがその自由の中で感じたように我々は他人から必要とされることが必要なのである。涙、別れ、非難、喜びなど、我々の身体を地面の方へひきつける人間関係の重さが必要なのである。人間の中の人間、人間に結びつけられた人間となることが必要なのである。

このように我々はさまざまな関係のなかに住んでいるのであるが、人間と人間との関係にもいろいろの段階がある。我々は平素隣人と肩を並べて歩いているが、それぞれの沈黙の中にとじこもっているか、殆ど意味のない言葉を交すかしている。ところが一度危機に直面すると、人はお互いに助け合い、自分達が同じ共同社会に属していることを発見する。そして他の意識を発見することによって自己を大きくするのである。そしてサン＝テグジュペリは、お互いの連帯に目ざめた助け合いの中で、感謝も同情も意味を失うような段階を人間関係の高い段階として認め、そこで我々は解放された囚人のように息をつけるのだとしている。これがサン＝テグジュペリの高度の愛と呼ぶところのものなのであるが彼は次のように述べている。

「我々の外にある共通の目的によって兄弟たちに結びつけられる時、その時にのみ我々は息がつける。そして経験は、愛するということ、それはお互いに見つめあうことではなくて一緒に同じ方向をみつめることだということを教えている。同じ束の薪の中で、同じ頂をめざしてそこで落ちあうべく結ばれる時にのみ仲間というものがあるのである。」

このように参加することは我々が世界と人間に対してさまざまな関係にあることを教えるのであるが、もし私が関心も欲望も愛情も持たなければ、対象として豊かな空間も美しい都会も私にとっては退屈な嫌悪すべきものになってしまう。これに反してもし砂漠のまん中で私が一つの明確な意志に、自分の生命を左右する井戸に、フランスで自分を待っている家の思い出にとりつかれるならば、その時には空間は磁化され、私は自分の位置を見出す。こうしてサン＝テグジュペリの *la présence* 「現前」の観念があらわれてくる。何処かに黒い樅と菩提樹の生えた園と自分の愛する古い家があり、それがその「現前」で砂漠に墜落した自分の夜を満しくくるならば、私はもう砂漠におちた単なる肉体ではない。私は自分の位置と方向を見出す。私はその家の子供で、その匂いの思い出、玄関の涼しさ、その家を活気づける声などで満される。沼でなく蛙の声までも聞えてくる。私が私自身を認め、砂漠の味がいかに多くの不在からなるかを知り、多くの沈黙からなるその沈黙に一つの意味を見出すためにはこのように多くの目標が必要なのである。

このような「現前」は広がりをも磁化し、我々に位置と方向を教え、世界に意味を与えるものなのであるが、同様にサン＝テグジュペリにとって文明は我々にその位置を教え、我々の行為に意味を与えるものである。それについて彼は次のようにのべている。

「そして僕は早くも、一つの景観は教養、文明、職業を通じてでなければ意味を持たないということを知るのだった。山国の住民たちも又雲海を知っている。しかし彼らはそこに寓話の世界のとばりを見はしない。」

砂漠は砂やトワレグ族や小銃で武装したモール人からなるのではない。砂漠の真の生活は草を求めてなされる種族の移動によって作られるのではなく今なおそこで演ぜられる遊戯からなるのであり、遊戯の規則にすぎないコーランが砂漠を帝国にかえるのである。同様に我々が子供時代に遊んだ一軒平方の園、そこに神々を住わせ、その一步一步にも意味があった、くみつくせぬ無限の王国、そして大人になってから再びそのとざされた文明へもどろうとしても絶望を感じずにすぎないその世界、それが子供にとって意味があったのはその遊戯の規則によってであって、そこへ戻るためにはその園へではなく、その遊戯の中にもどらねばならない。

こうして「人間の土地」では事物を結びつけ、それに意味を与えるものとしてのサン＝テグジュペリの「文明」の観念の基礎がきずかれています。それは事物を結びつけてそれに意味を与え、見知った親しい顔にかえる事物の結び目としての文明の観念であって、我々は羊や

山羊や家や山のために死にはしない。なぜならそれらのものは何物もその為に犠牲にされなくても存在するからである。しかし人はそれらの事物を結び親しい顔にかえる、目に見えない絆を救うために死ぬことがある、なぜなら人はその時には又建設しているからだという風に発展して行くものである。

我々はさきに「夜間飛行」に於ては「行動」という語がサン＝テグジュペリにとって重要であるのを見たのであるが、それは「人間の土地」では「職業」という語にとってかわられている。³ そして P. H. シモンも言うようにサン＝テグジュペリが「行動」という言葉以上に「職業」ないしは「仕事」という言葉を受容するのは意味のないことではないのだ。⁴ そしてサン＝テグジュペリの愛する今一つの言葉に **responsable** 「責任がある」という言葉があるが、それは彼の気質とあいまってこの「行動」から「職業」への転換に大きく作用しているものであろう。

彼は *Etre homme, c'est précisément être responsable.* 「人間であること、それはまさしく責任があることである。」と言っている。「責任がある」というのは彼によれば、自分に、郵便物に、僚友に責任をもつことであり、彼が参加せねばならぬ、生者のうちに於て新しく建てられるものに責任をもつことであり、自分の仕事の範囲内で人間の運命にいささか責任をもつことである。それは又自分に由来するものではない悲惨を前にして恥を知ることであり、一石を投じながら世界の建設に貢献しているのだと感ずることである。このような彼は闘牛士や賭博者の死を軽んずる態度を貴ばない。そしてそれが承諾された責任から由来するものでなければ貧困さか若さの過剰にすぎないとする。そしてこれにたいして人間の真の死としてある庭師のそれを記録する。その庭師は死にのぞんで、自分が仕事を愛したことを語り、自分が耕さずにのこしてゆく土地についての心配を語るののであるが、サン＝テグジュペリは、彼こそはすべての大地や木々に愛をもって結ばれていたとし、それが創造の名に於て死と戦った真の勇者の死であるとしている。

又僚友のギョメがアンデス山中で遭難した時のことや、自分と僚友プレヴオが砂漠で遭難した時のことを語り、人間が危地に陥った時、その人間にとって遠くの安全な世界にいて彼の安否をきづかい、彼の沈黙に絶望している人々の方がかえって遭難者に見え、その親しい人々の遭難を救うために自分の危地を脱すべく勇気をふるい起すという奇妙な心理の働きを語りながら、真に「責任がある」人間のあり方をのべているのは興味深い。

このように「人間の土地」には彼が砂漠を飛んだ時の人間に関するさまざまな考察がしる

されているのであるが、この作品で今一つ重要なのは彼がそれを求めて砂漠に赴いたところの人間の *la plénitude* 「充実感」の問題であろう。

「充実感」というのは例えば人間が絶望の底に達し、諦観して心の平和を知り、自分自身を発見し、自分の真の友となった時に知るような、自分には知られないある本質的な要求を満してくれる人間としての充実感、豊かさをいうのであって、彼は又それを「真理」とも「本質的なもの」とも「解放」とも「普遍的なもの」とも呼んでいる。

そしてこのような「充実感」に達する道として彼はまずスペインの内乱の時彼がマドリードの前線で会ったある軍曹の例をあげる。この軍曹は元バルセロナの何処かのささやかな勘定係であって、貧しく、仕事のすんだ後にはひとりぼっちで、五体をかくす場所さえ持たなかったのに、この前線では同情も感謝もともに意味を失うような戦友愛の高みにふれ、自己を完成し、「普遍的なもの」に加わり、解放された囚人のように息づいている。そしてサン＝テグジュペリはこれについて、移住の時空を渡るかもの鳴声を聞いて飼われていたあひるも馴れない跳躍をこころみ野生にもどろうとするように、この元勘定係の狭い運命の上を広い海の風が一吹きしたとき、友と誘いあわせて戦争に参加したのだとし、羚羊の「真理」が恐怖を味うことであり、それによって自己の最高の芸当をひき出されるのなら山犬が何であろう。羚羊の「真理」が太陽の下でその爪の一撃にひきさかれることにあるのならライオンが何であろうと言っている。同様にバルセロナの無政府主義者の地下室で、犠牲と相互扶助と正義の厳しいイマージュのために、自分の中に眠っていた見知らぬものが一度目ざめたのを感じたものは無政府主義者の真理だけを知るであろうし、スペインの僧院で一度ひざまづきおそれている尼僧達の保護に任じたものは教会のために死ぬであろうと言っているが、ここに彼の「モラルの相対主義」と呼ばれるものがあらわれてくる。それを彼は次のように表現している。

「真理というものは論証されるものではない。もしこの土地で、そして他の土地でではなく、オレンジの木が丈夫な根をのばし、果実をつけるならばその土地がオレンジの木の真理なのである。もしこの宗教、この教養、この価値の階梯、この活動の方式が、そして他のものではないものが、人間の中に於てあの充実感を助長し、彼の心の中に知られずにいた王者を解放するとするならば、それはその価値の階梯、その教養、その活動方式が人間の真理だからである。で論理は？ 論理は人生を説明するのにつじつまを合わせていけばいいのだ。」

そして戦争に反対する人々については戦争をこぼさない人々を非難する前にまず理解すべ

きだとしているが、又戦争に反対する人々にも理があるとしている。

そして「本質的なもの」「普遍的なもの」を解放するためには、こうしたそれぞれの真理を対置すべきではなく、その区別を忘れるべきだとし、その区別は一度認められれば、動かしがたい多くの真理とそれに伴う狂信を将来し、右翼と左翼、せむしと非せむし、ファシストとデモクラットという風に分化して対立し、かえって「本質的なもの」の解放をくらくするものだとし、「真理」とは混沌を生み出すものではなく世界を単純化するものであり、ニュートンの法則のように林檎の落下と太陽の上昇とを同時に説明する普遍的なものだとしている。

又現代の戦争についてはそれはもはや血なまぐさい外科手術にすぎないとし、戦友との間で互いにおけ合うパンの味で戦争の価値は認めはしたものの、戦争の含む憎悪は創造的な何ものをもつけ加えないとし、真に我々を解放し、「充実感」に達する道として我々すべてを結びつけるある目的の中で我々自身の役割、我々はすべて歩哨であって、おのおのの歩哨は帝国全体に責任があるのだということを自覚することだとしている。⁵

III

以上「夜間飛行」と「人間の土地」を検討してそれぞれにあらわれている思想を見てきたのであるが、P. H. シモンも言うようにこのサン＝テグジュペリという作家は、一作ごとに思想の発展と展開を見せている作家であるので、「夜間飛行」と「人間の土地」の間にもそのあとが見られる。⁶我々はそれをあとづけてこの小論のしめくくりとしたい。

まず第一に見られるのはさきにもものべた通り「行動」から「職業」への転換である。「夜間飛行」では「行動」と「個人的幸福」の対立矛盾という点から問題がとらえられていたためにこの「行動」という言葉が大きな比重をもって用いられていたが、この言葉は「人間の土地」ではかげをひそめ、これに代って「職業」という言葉が用いられている。そしてこの転換にあらわれるものは、前にもものべた通り「人間であること、それはまさしく責任があることである。」という考え方であるとともに、マルローのように冒険へと激化せず、理性と規律を重んじクラシックへと向う彼の気質そのものである。

第二の点は P. H. シモンによって「英雄的ヒューマニズムより人間的ヒューマニズムへ」と呼ばれている転換である。⁷「夜間飛行」の主人公リヴィエールは「夕方音楽堂のまわりをまわる小さな町のプチ・ブルジョア」のことを思い、彼らはもともと存在しないのである

から彼らにとって正、不正は意味はない。人間とはこねてやらねばならない蜜房からとったままの蜜蠟であって、これに魂を与え、意志を作ってやり、自分自身の外になげ出してやらねばならぬと考えているのであるが、このリヴィエールの目には作者自身の誠実さと、人間的な気質によって柔らげられているとはいえ、恐ろしい光、人間の偉大さについて自分自身がえがいているイマージュの上に常に民衆をはりつけにしようとしている指導者の熱狂が光っているように見える。これに反して「人間の土地」に於ては砂漠に於てさまざまな出来事を通じて人間の「充実感」に達し、真の解放を味った人々をえがきながら、こうした「充実感」に達しうるのは特定の職業に従事する特定の人々だけではなく、機会さえあれば誰でもそうなりうるのだという立場をとり、かつて汽車の中でみたポーランド移民の子供のなかに将来のモツアルトの可能性を認め、それが空しく埋もれ、ほろびてゆくのをなげいている。

第三の点は *l'Esprit* 「精神」への認識であろう。「夜間飛行」に於ては主人公のリヴィエールは「行動」の世界に住み「出来事」に奉仕する人としてあらわされていた。前にもふれたように「出来事」というのは「生命」の別名であって、「生命」が何か新しいものを作り出そうとする時それは一名「出来事」とも呼ばれたのである。したがって「夜間飛行」に於ては、壮大な、起源のわからない、花と咲き輝き、人間によって愛され、賢者からも英雄からも崇拜される値打のある力である「生命」、処女林をもちあげ、あらゆる大事業を生み出す「生命」につかえる人、リヴィエールの物語が語られていたのであったが、「人間の土地」に於ては前作にあらわれなかった「精神」があらわれてくる。「精神」とは識別力であり選択であり、絶対と普遍の考察であり、名誉と叡智の法則であり、愛と犠牲の心である。そして彼はこの作品の末尾を *Seul l'Esprit, s'il souffle sur la glaise, peut créer l'Homme.* 「精神の風が、粘土の上を吹いてこそ、はじめて人間がつくられる。」という言葉で結んでいる。

以上で此の小論は終るのであるが、前にものべた通り、サン＝テグジュペリは一作ごとにその思想を発展、展開させて行った作家であるからこの「人間の土地」に於てもそのすべての思想が完全にあらわれているわけではない。たとえばこの作品にあらわれている「文明」や「精神」やその他についての考察も以後の作品においてより十全に展開されているものであるから、ここではあまりくわしくはふれず後日にゆずりたい点と、この小論が「夜間飛行」より「人間の土地」への思想発展をあとづけた中間報告である点を最後にことわってこの小論を終りたいと思う。

注

- 1 Pierre-Henri Simon : L'homme en procès P. 127.
- 2 このような形式で「人間の土地」を書くことをサン＝テグジュペリに示唆したのはアンドレ・ジードであるといわれる。Luc Estang : Saint-Exupéry par lui-même P.78.
- 3 Ibid. P. 79.
- 4 Pierre-Henri Simon : L'homme en procès P. 129.
- 5 サン＝テグジュペリはさまざまな方法でモラルの相対主義への傾向を是正しているが、しかし、この是正はかならずしも論理的ではなく、しばしば反対の主義との単なる関連によって得られている。Ibid. P. 139.
- 6 Ibid. P. 146.
- 7 Ibid. P. 145.